

千草子

sen sōko

於大と
信長

忍ぶは一定 忍び草



於大と
信長

忍ぶは一定 忍び草

千草子
sen soko

福武書店



千草子 (せん・そうこ)

一九四六年鹿兒島に生まれ、京都で育つ。鎌倉・室町時代の言語を中心とした国語史を研究する国語学者で、現在非常勤講師として、大妻女子大学、文教大学、同短期大学部、横浜国立大学で教鞭をとる。八五年、「抄物文献を資料とする中世語法の研究」で佐伯国語学賞を受賞。著書に「ハビアン——藍は藍より出でず」「Fabian Raoujit——羽給と若王子」(清文堂)がある。

於^お大^{だい}と信長——忍ぶは一^い定^{てい} 忍^{しの}び^び草

一九九一年二月一〇日 第一刷印刷
一九九一年二月一六日 第一刷発行

著者 千 草 子

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三二八
〒130 電話(03)二三〇一二三一
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)
(定価はカバーに表示してあります)

目 次

一	川流れ	7
二	川瀬	14
三	針あやまち	26
四	雨中行	40
五	三略軍談	49
六	木綿讃談	66
七	柿もぎ	82

八 阿古屋の貝歌

88

九 連子窓

108

十 竹千代噺

113

十一 裏山

128

十二 忍ぶは一定 忍び草

149

十三 夢見の章

177

あとがき

198

裝丁 菊地信義

於大と信長——忍ぶは一定いちじょう 忍び草——

——信玄、膝を進められ、その外信長の教寄には何かあると御尋ね候。舞とこうた教寄にて候と申上候へば、幸若大夫来り候かと仰せられ候間、清洲の町人に友閑と申す者、細細召しよせ、まはせられ候。敦盛を一番より外は御舞ひ候はず候。人間五十年、下天の内をくらぶれば夢幻のごとくなり。是を口付きて御舞ひ候。又小うたを教寄てうたはせられ候と申候へば、信長はいな物をすかれ候と信玄仰せられ候。それはいか様の歌ぞと仰せられ候。しのぶは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりをこすよの、是にて御座候と申候へば、ちと其まねをせられ候へと信玄仰せられ候。某、沙門の儀に候へば申したる事も御座なく候間、まかりなり難しと申上候へば、是非々と仰せられ候間、まねを仕候——

一 川流れ

天文十九年のその日、九月も終わりだというのに真夏のように暑かった。群れなすすきのそよぎを見なければ、今が秋であるなどと思わぬような日であった。

於大は、阿古居を一昨日立ち、実家の刈屋の城に逗留し、今日未明にそこを立った。今を限りにと思う山河は、緑に、藍に、美しかった。駕籠は、刻々と尾州下の郡那古野の城下に近づいている。

於大は、阿古居の久松俊勝に嫁ぐ前に、三河の松平広忠の妻となっていた。松平家が今川義元に近付き、反織田を表明したため、実家の水野が織田方である於大は離縁されたのである。

わが子竹千代を松平家に残してきた立場は微妙であった。そのため、ほとんど阿古居の城下を出ぬ日々が続いていた。刈屋を訪れたのも久々であったし、那古野の辺りまで来るのは、十何年ぶりである。

信長に会おうとしていた。会って、竹千代の助命を願わねばならない。今川義元の所へ人質として送られる途中、信長の父信秀に捕えられた竹千代は、兄の放った間者の報告によると、きわめて危険な立場にあるという。信秀を含む一派は、竹千代を斬ることによって、広忠没後の松平一族を寸断しようと考えているらしい。今、百姓や漁師、さまびと 仙人にうちまぎれ、竹千代の成人を待ち望みながら忍従の生活に甘んじている家臣の息の根をとめるべきだという意見が高まってきているという。それは、戦さの駆け引きとして当然のことであろう。それが故に、於大はじっとしておられなかった。すでに武将として型の定まった信秀に懇願しても効果はうすい。信秀に反発しつつもその器用をめであれ後継者として織田家臣団を結束させていけそうな信長に頼むのが得策であることが、また、万が一の賭かけにも若い人ほど柔軟にに応じてくれそうなことが、女である於大にもわかっていた。夫俊勝は、自分が表おもてに出られぬことを詫び、従者一人、駕籠か昇き二人を付けてくれた。於大はそれで十分であった。無謀じゃと許してくれぬ時は、忍び出るつもりであったから。兄は兄で、信長の近臣として仕えながら、力になってやれぬことを詫びた。於大は、これは自分が母としてすることなのだから、二度とこの地を踏めずとも本望だと伝えた。

那古野に近付くにつれ、不安になった。信長に殺されるのがこわかったのではない。信長に対面する前に、名もなき侍から斬り殺されるのはいやだと思ったからである。

——いずれ斬らるる運命ならば、せめて信長に会って、竹千代のことを申し出てからにして

下され

——どうか、信長殿に会わせてたまわれ

手をしっかりと合わせて、御仏みほとけに頼る。合わせた手の平は、なぜかすがしかった。駕籠の中はむしむししているのに、何か涼しさがあつた。於大は、それを御仏のあわれみだと思った。このあわれみは、さい先さきの吉兆を示していると思うに至ると、笑みさえ洩れてくるようであつた。

くすぐるような川音が耳に入る。駕籠は、川沿いのゆるやかな坂にかかっているらしい。こんな暑い日だと、駕籠をかく者も難義かみであろう。徒歩かちきの平太夫も年を取っている。この川のほとりで暫し休もう。

川原には幸い木陰もあつた。川の水も澄んでいて、上天のほがらとした日輪の照りつけにもかかわらず冷たく、飲むことができた。

狭い駕籠に坐りづめであつたので、足が痺れ、足先が火照つてもいた。素足になり、浅瀬に浸す。

快い冷たさが、於大の重い頭まで涼やかにした。さきほどの掌たなごころの感覚が戻ってきた。

——何とかなる、何とかなる、時を待とう。

心にゆとりが出たついでに、川上の方を見る。向こう岸に白い馬が一頭つながれていた。草もなく、小石ばかりでは、暑かろうに……

ふと川中に目を戻すと、何か細長い丸太めいた物が流れて来る。

膝元に冷気が走った。

——死人か

あわてて、汚れから逃げようとした。その時、それはくると回転し、力強いぬき手の主となつた。

水練をしていたのか

背浮きをして流れにまかせていただけだったのか

一瞬、安心したが、またすぐさま、身をひるがえさねばならなかった。

その水練の主が——確かに男である。少年らしい——こちらを目がけて、はっきり泳いで来ているのである。

澄んだ川の底は、思ったより水苔が繁茂していて、あわてた於大の足をすくい、焦るほどすぐには川原には上がれなかった。

片足が川面に残った。むずと掴まれてしまう。

「おまえは、誰だ」

「どこから、来た」

この二つのことをたてつづけに大声で聞いた。

奇妙に高く結いあげた茶筌まげが、水に濡れそぼっている。それは、黄や緑や朱の平紐ひらちもで巻き立てるように結いあげられていた。口のきき方、骨柄こつがら、あの噂に聞いた信長そのものである。領主でなければ、年端としはの行かぬ水練者の分際ぶんざいで、「どこから来た」と聞けるはずがない。

於大は、「信長さま」と小さく叫んだ。少年は手を離れた。いや、少年と思えたが、十七、八歳であろうか。足首をぎるりと締めつけた手は、十分、この少年が大人になっていることを示していた。

於大は、川原に飛びすさり、ひれ伏す。

遠くから様子を見ていた家来が、駆けつけて来た。

「御台さまに近付くな、去きがれ、こわっぱ」

「この方をどなたと心得る」

「阿古居の久松俊勝様の奥方じゃ。すさりおろし！」

於大が制止するひまはなかった。

忍びの旅だということも忘れ、戦さ場の名乗りの如くこれだけのことを言うと、家来は、刀をてんでに抜きにかかった。

「かなわねえなあ」

小わっぱは、川中に飛び戻った。

「平太夫、藤伍、静まりやれい。あの御方は、信長さまでおりやる」

六つの目が訝しげに川中に向かう。

「ワッハッハ、よくわかったな、俺が信長だってことを。久松の御台は、間者にしてやりたいぐらいじゃ」

川中の明るい笑い声に安堵して、初めて於大は信長を見つめる。しかし、すぐ視線をそらさねばならなかった。

なぜなら、信長は腰布ばかりで、ほとんど裸であった。よく鍛錬された体に、水滴がキラキラと輝いて落ちて行った。

「そのまま、待っている。今、上を着てくる」

信長はそう言って、川上に向かって泳いで行き、今度は、白馬にうち乗って川を渡って来た。暑さに退屈していたであろう馬は、水にしとりとなじむように歩む。

「見事なるお馬さばきじゃ」

家来達は、世辞とは思えぬ素直な感嘆の声をあげている。

涼しげなる水音をはねあげて馬は川原に立つ。信長は、馬腹を軽く叩きながら於大に言った。

「手をあげる。立て。ひれ伏しては、顔が見えぬ。久松の奥が、わしに何の用だ」

於大は立ちあがる。

信長の聡明さに懸けた。くだくだしい口上は不要であった。

「竹千代の命を継いでもらうためにござりまする」

「ハアーン、すれば、お前が於大か。竹千代の母者か。そう言えば、久松の御台は於大じゃった」

そう言うのと、じろじろ、不躰な視線を向けてきた。

「そんな、面倒な話は、社で聞こうず。ふうつ、暑や。水からあがると、暑くて堪まらぬ。冷えた瓜が食いたい。川沿いに、坂をのぼれ。のぼりきった所に、ちとした平野がある。そこにくすんだ朱の鳥居があつての、熱田飛明神と額が掛けてある。そこだ、すぐわかる」

於大は見送ろうとして、黙礼をした。

「お前は、先に行くんだ。人質であ。乗れ」

信長は、自分のはだか馬を指さした。

於大は、たじろいだ。この人は、自分をためしている。もしや、同乗したとたん、無礼者と言つて斬り捨てゝる気かも知れぬ。しかし、迷っているひまはなかった。少なくとも、今、命令にそむいたら、竹千代の話が切れてしまう。これが運命の流れなら、信長のこの命に従うことが最も賢明な道であらう。

馬上の於大の背後に、信長の濡れた体を感じられた。おそらく、手拭でなど拭いていないのだらう。何と大様おおようなお方じやこと。馬が一度大きく跳はねた時、信長の激しい心しんの鼓動を聞いたように思ったが、社はもう目の前であった。

二 川かわ 瀬うそ

普通、領主であっても、社の前では下馬の礼をとるのが理すじである。ところが、信長は、なごりの夏草が薄と競うように生えひろごっている祠ほこらの脇を駆け抜けけると、どんどん奥へ進む。進みながら、「爺、太田の爺」とわめいている。

しかし、この声で、於大はどんなに安堵したことか。先ほどの心の鼓動から、女としての危機を連想したこと自体、おかしくなるほど子供こねっぽい声こゑ音も混じっていた。この奥に、隠いれ庵おやでも造ってあるのか。そこの賄いが太田某……

「おおう、若殿……」